【六月の言葉（令和三年）】

お葬式は人生の卒業式

葬儀では、遺族や会葬者の多くは礼服や喪服で参列されています。その中にあって、導師だけがきらびやかな装束（しょうぞく）に身を包んで登場します。カラスの群れの中にクジャクが一羽だけ迷い込んだようで、不自然にも感じられる光景です。普段は黒い衣（ころも）を着用していることの多い住職が、最も厳粛（げんしゅく）でしめやかな葬儀の場で、場違いとも思える装（よそお）いになるのはなぜなのでしょう？　あれは、新たな仏さまの誕生を祝福する姿を演じているのです。先に仏さまとして生まれ、私たちを迎える側になられた故人を讃（たた）えている姿です。

ご本人にとっては、人生の卒業式であり、残された者にとっては、浄土での再会を約束する儀式です。このたびの別れは、束の間であって永遠のさよならではないのです。

「また会える世界がある」

この思いが、悲しみから新たな一歩を踏み出させる力となります。

〝ともに会える〟の世界を恵まれている私たちです。悲しみを抱きつつも絶望せず、〝いのち〟に真摯（しんし）に向き合う新たな歩みが、そこから始まります。

（吉村隆真著「心の読み薬」参照）